

六花



RIKWA

1

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)
cover design Yuna Mizuno

鶺鴒の宿る柳に日差し小晦

大池の対岸に人小晦

箒目の正しき御陵煤日和

玉垣の苔むして年つまりけり

ひととせの表紙も煤け歳送る

高^{たか}御^み位^{くら}山^{やま}へ灯の列大晦日

鶴亀の筆快活やお正月

みささぎに元日の空集まりぬ

元旦や播磨風土記の国に住み

書初の妻の後ろを通りけり
白雲に元日の日の当たりけり
年賀して叩き牛蒡を出されけり
元日の湖うみに和毛にこげを拾ひけり
元日の日の移りたる播磨富士
松の抱く若岩濡れてお元日
飛馬ひめ始風はじめのごとくに帯を解き
二神に正月虹の鳥居なす
玉垣の内へ正月落葉かな

白菜を噛めば三日の甘露かな
千代八千代凍てし御陵にひれ伏さめ
箒目のさゆるぎもなき淑気かな
むらさきの匂ふ躑躅の帰り花
白息を互ひに犬の訓練士
霜の田に大樹の影のありにけり
冬耕の人来て土手を見上げけり
水仙の花の写楽に見えて来し



崩れつつもとに戻りぬ踊の輪
踊の輪母の背中の他人なる
ほどけては風となりゆく芒かな
風音に光を増せり芒山
波立てる芒のホーム母の郷
ひと駅を歩く芒の風の中
掛稲の影のはみだす田面かな
古傷の今も足裏あうらに刈田風
待宵やひとりになるは易からず
迷ひては海に遠のく菊の路地

引く波を包みては寄す秋の海

上村ゆきゑ

ひくなみをつつみてはよすあきのうみ うえむらゆきえ

引く波を包みては寄す秋の海

寄す波のうらがへり引く秋の浜

秋蝶の鈴ふるさまに湖の上

毛羽立ちてもとにもどれね尾花かな

風いでて穂波のそろふ芒原

秋の海は夏の風と冬怒濤の中間で穏やかな中に人のいない浜など、どこか寂しさの漂う光景。その汀を作者はじっと見ていてこれだ！と手を拍った。寄せた波が引いて行くと同時に寄せてくる波は引く波を押し上げ、包み込むようになると発見したから。「包み」には万葉の「伊勢の海の沖つ白浪花にもが包みて妹が家づとにせむ 安貴王」に通うかもしれぬが、そのオマージュを写生に反映したのだから句の瑕疵とはならない。この句における「包み」の意味は歌とは全く違う。ゆきゑが写生をしつかり身につけようと努力しているがゆえに呼び込めた主観写生の作品。

雪卿集

すすき

永田万年青

青空を大王すすき指してをり
花すすき川の中州を華やかに
枝先の辛子となりぬ赤とんぼ
天高し鎖に錆びる愛の鍵
草紅葉小さき魚の大きな輪

捨案山子

松本文一郎

草虱ロープウエイに乗りて来し
煤黒の栗の太梁宿の秋
用水路眼を剥いてゐる捨案山子
コスモスの鉢に眼の行く花舗の先
長き夜や読み始めしはエピローグ

雪卿集

籠の虫

志方章子

雨止みて美しからぬ虫の声
熊蟬の生きてゐるかに止まりをり
砂浜を踏みゆく重さ秋涼し
遠き野に鳴いてゐるかに籠の虫
秋涼し雀跳ぶのを見てをれば

下り鮎

佐津のぼる

吹かれずもなびくかたちの洲の芒
穂芒や牛のにほひの牧の風
風のとび径の消さるる芒原
いくたびも合流を経て下り鮎
猫車露けき畦に置き去りに

雪樹集

地虫鳴く

廣畑 育子

造船所小さく地虫鳴きにけり
色鳥や人来ぬ朝の岬にて
乱れ萩背にしてゐたる遊女塚
三日月に能たけなはとなりきたる
篝火の薪たきぎ足さるる月夜かな

萩

住田千代子

咲ききつて夜明けとなりぬ烏瓜
白萩や能の運びのぶれもせず
墓参かな初めて靴を履く子連れ
山道を狭めて萩の乱れけり
潮風に吹かれて青き海桐の実

世界一読みづらい譚です。

蛩雪譚

六甲選



二十八年新年号鑑賞

明けましておめでとうございます。

と言つても、ここに出ている句はすべて昨年の秋に作られた物ばかりなので違和感はあるう。新年の句を季節の前取りで詠んでも季節感が伴わないのだから先取りの句を詠んでも本意が読者に伝わる方がおかしい。ではどうするか。答えは一年前に詠んだ新年の句を出すのだ。しかし現実には毎月の投句に追われ、それどころではない。それが現実であろう。投句者に限らず殆どの俳人にも言える。それを季感を失わずに詠めるようになったら一人前。そのために、穴が開くほど季節を見て季節を感じておくこと。信用のおける歳時記をしつかり頭にたたき込んでおくこと。だ。波多野爽波は「季題とは長い年月風雪に晒されて生き残った日本語のエッセンス」と説く。季語をすべて覚えるには、基本季語で五〇〇、傍題も入れると二五〇〇近くある。だが基本季語で句を詠むのがいい。主宰は天の邪鬼だから、基本季語以外の難しい季題の句は知らなかった悔しさも含めて嫌悪感をもち、悪意をもって評をするきらいがあるから注意。ただし今年は出来る限り誉めようと思う。だから誉められない句はよほど悪い句と想つていただければ間違いない。でも文芸作品に正解答などはないのだから心配しなくてもいい。しかし格調高く、佳い作品は誰が見てもどこへ行っても佳いのである。悪い作品はどこへ行っても誰が見てもつまらないのである。今年もそらぞ

らしい句を詠まないよう自身でも気をつけたいと思う。あなたにも、ぜひ今年も秀句が降りて来ますように。

崩れつつもとに戻りぬ踊の輪 笹村 政子

物事は一旦動き始めると、慣性によつて修正が利きにくい。一旦止まれ！と櫓から声を掛けてはせつかくの雰囲気は壊れてしまう。だがよくしたもので、宇宙の摂理はいつの間にか崩れかけた踊りの輪がだんだん円を取り戻してくる。この法則はフックの法則（力学や物理学における構成則の一種）にいう復元力なのである。これもイギリスの物理学者、ロバート・フックという人が地球上にいなかったら、法則の名前さえなかったであろう。年頭からすばらしい！句。



六花集



新年号

平居 濤子

開きそめひとときは香る秋薔薇
嫁となり厨の窓の実南天
手のひらの形に入江秋の湖
芒原泳ぎてゐたる幼き手
置き忘る眼鏡ひやか岩の上

谷口 一猷

釣舟の影身動かず秋の池
海の秋窓はみ出して溢れけり
秋の湖天のうろこ落ちてをり
水鳥の線残し消ゆ秋の湖
秋の湖竹生の遠くなりけり

江見 巖

高原にすすきの風や平家そば
真ん中に稲の実れる後楽園
手の作業足の作業や秋美術
初時雨僧侶の走る永平寺
紅葉のうつる廊下や黒光